

Title	ディクトミ的思考：現代社会における危機の一断面
Sub Title	Dichotomus thought in modern society
Author	横山, 寧夫(Yokoyama, Yasuo)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1960
Jtitle	哲學 No.38 (1960. 11) ,p.225- 247
JaLC DOI	
Abstract	The report attempts to analyse the social and cultural basis of the dichotomy of thought exceedingly prevailed in the modern society under mutually opposite forms: right or left, friend or foe, sink or swim. Originally this thought has been derived from the ideological thought, and it also arises in the thought of bystanders. The leading points of this causes are as follows. 1. Ideological opposite situation, especially with relation to the modern massification. 2. Intolerance of thought caused by the ignorance for the another side of knowledge, as a result of specialization of labours. 3. Loss of social solidarity, above all in the time of reconstruction of society. 4. Utopian consciousness and fall consciousness. the former does not compromise by halves, and the latter prefers behaviors to theory. 5. Social status of the bearer of thought. The frustrations of those who are isolated from the political life give out to extreme reaction or retrocedence. 6. The thought as a borrowed plums. It is not worthy to throw away the thought if it is a borrowed one. 7. Authoritarian personality. It brings forth fast solution and intolerance to ambiguity. 8. thought inclines to the puriness. It premises the imperfect society, and it will stick at nothing to gain its end. And in oder to avoid this dichotomy, one has to educate the spirit of tolerance in company with its sociological reflection. To solidify the sponteneous comnection between the members of open society, will be of use to take off the unnecessary anxiety between them, and will help to pave the way for tolerance of thought.
Notes	横山松三郎先生古稀記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000038-0232">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000038-0232</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ディコトミー的思考

——現代社会における危機の一断面——

横山 寧夫

「保守主義は常に直接的な個々の場合から出発し、自己の特殊な環境をこえてその地平を拡大しない。それは具体的な細目の変更を問題とするが、併し自己の生きる世界の構造については本来顧慮しないのである。これに反し進歩主義的行為は可能的なものの意識によつて生きる。……彼が具体的なものと戦うのはそれに代えて他の具体的なものをそなえようとする為ではなく、一つの異つた体系的端緒を欲する為である。」(K. Mannheim, *Das konservative Denken*. 邦訳卅四頁)

「私の若い頃には、ある男がすべての重要な点で good である場合には、一般に彼は<sup>クリスディアン</sup>基督者と呼ばれていました。ことに彼が常日頃から無私であり、慈悲に富み自己に対してなされた罪に寛大であり、逆境にあつて心の明るさを失わぬときにそうでした。……ところが今日彼は基督者だと言え、それは第一に彼は何らかの教会に属しており、ある明確な見解を持つている、彼は共産主義者ではないということを意味します。つまりそれは今日のイデオロギー闘争において、或はこの教説の混乱時代にあつて、私の立場はここにあり、あそこにあるのではないということの意味するのがあります。」(B. Willey, *Christianity Past and Present*. 序言。講座「近代思想史」第六卷一〇五

頁

こゝにディクトミー（二分法）的思考と名づけられているものは、右の例にもその一端がみられるように、現代社会の全精神領域に亘つて対決を迫られている対立的なものゝ考え方一般を指すのであつて、特に厳密な論理的矛盾關係にある特殊用語として用いられているのではない。現在吾々の周囲には政治的にも文化的にも多様な思想を「黒と白」「右と左」「敵と味方」というような割切り方を以てする思考法が余りにも満ち溢れている。そしてそれは相反する思想から新しい真理を見つけ出すよりも、自由な思考を犠牲にして徒らに政党的対立、宗派的対立、思想的対立を激化せしめ、危機にある現代社会の諸問題の解決を益々困難ならしめているように思われる。此の小論は、その主張されている意見の内容についてではなく、かゝる一般の思考型そのものを社会学的視点から対象とし、これを現代の社会的危機の問題と関連せしめつゝ考察しようとするものである。即ち元来、闘争がイデオロギー的性格を帯びるような場合には相互に対立する分子は夫々自己の正しいと信ずる立場を基礎として二つのブロックに分れてゆく傾向をもつが、これが固定化し、一般の思考型にまで普遍化された場合、最早イズムの対立のみでものを考えることは大した意味をもたないこと、亦如何なる社会的条件がこのディクトミー的思考を助長するかを見極めることによつて、社会問題に対する観念的思惟支配からの脱却とその対策、歴史的視点の獲得の重要性などを改めて認識しようとするものである。

## 1

ディクトミー的思考は先づ種々の思想内容が相互に断絶している立場にあるものとして把えられる。此の場合の最

も極端な典型は「一切か無か」(all or nothing)という純粹好みの思考として表現されよう。此の立場は後述するように、場合によつては一面無責任な傍觀者の態度としても現われるのであるが、本来それは何等かの危機感に基礎付けられた決意性を内有しているものである。その意味は或る一般に認められた最高価値に対して自己を投げ出してゆくような樂觀論に支えられていたのではなく、懷疑より発し乍ら、破滅の危険をもつ未知の世界の中に自己を賭ける主体的眞実さとしてのみ承認されるのである。併し此の危機意識を吾々は内的な超越の問題としてではなく、むしろこれを極端な性急さを意味する處の社会的危機状況における病態としてのみ取上げることが先づ断つておきたい。

危機にある社会とは、社会の思想や権力の諸勢力が上下或は内外に分裂した結果、相互に対立闘争し賭をし合い、もはや調停しえなくなつたような状態を指すものとして考えられる。併し社会の現實はむしろその諸勢力の不斷の葛藤をその本質としている。従つて問題はそれ等の單なる対立ではなく、その各々が自己の思想内容を絶對化して、その他の如何なる思想をも拒否する場合である。それ故或る社会において唯一の思想のみが絶對化され、他の思想は圧倒されている場合には、表面には社会的風波を生じないようにみえても、それはやはり潜在的な危機の時代とみななければならない。危機を自覺しないこと自体が既に危機に直面しているとも考えられるからである。例へば封建的絶對主義とか思想統制下の戦時体制などは此の意味では思想的危機の時代である。このような時の思想は一つの政治的権力及びその理念の絶對化を反映し、目的のみが尊重されてその手段は無視される傾向がある。これを現實に引戻し、理念の固渇化から救う意志は現實のもつ無限の多様性そのものに畏敬をもつ寛容の精神から生れるものなのだが、現實の社会の状況とか發展段階を無視して徒らに多種の思想が思慮なく放任されている状態も決して健全な状態とは云えない。眞實の思惟はそれ等の動的な綜合に求められる。單に思考法の対立という点からみれば、西欧の精神史に明

らかなように、ギリシアの昔から多くの思想家の中に霊と肉、イデア界と現実の如き二元論の形で合理主義と非合理主義との対立は現在に到る迄続けられている。けれども吾々は例へばプラトン、アリストテレス、基督教を決して理想主義、現実主義、精神主義と云つたイズムの範疇で割切ることには出来ないであらう。それは亦、合理主義的或は非合理主義的要素の何れが優位にあるかと云うような問題でもなく、それ等の相反的要素は同一のエネルギーとして相互にダイナミックに統一されているのであるが、当面の問題はむしろかゝる二元的思考の現在における固定化、觀念化、即ちイズムそのものではなく、云はば歪曲された思考形式の対立を現在の精神状況や社会的危機意識から解明することにある。

一般に現実の多様性を善と悪、敵と味方、右と左等の關係に分離する考え方は先づイデオロギー的思考に関連して抱えられて来た。イデオロギーという言葉は十九世紀初頭フランスの感覺論者デステュ・ド・トラシーの著「イデオロギー綱要」(*Elémens d'idéologie*. 1803)によつて一般化されたと云われているが、それ以前にも当時デカルト的形而上学に対立した感覺論者の間で用いられていたという。此の感覺論哲学は一切の彼岸的理性的權威への懷疑より発し、認識の根拠を現実的な経験や感覺の中に求めようとしたのであるから、十七八世紀の形而上学に対立したと同時に、現世的生活態度への明確な肯定として現われた。R・アロンがイデオロギー的思考の起源をフランス革命に求めたのもこれに關係があらう。(R. Aron, *L'opium des Intellectuels*. 邦訳「現代の知識人」) 即ちこゝで一方には家族、宗教、權威によびかけ、他方では平等、道理、自由によびかける二つの対立する立場が歴然と現われて来たからである。彼は右と左のイデオロギーは近代の感覺論哲学によつて力を振り起されたものであるとも云つている。そしてこれ等のイデオロギーはたとえ神の存在を否定しないにしても、超人間的なものを度外視して人間世界を考え

る限り無神論なのである。特に進歩的な党派は多年の流血と混乱を伴わずに目標を達することが出来ないので善と悪、将来と過去という単純な二者択一の考えを抱き易い。それは道理の力への憧れ、科学は社会秩序と人間を変革するというオブティミズムをもっている。ともかく左右何れを問わず、これ等のイデオロギーはヨーロッパが文明の多様性に気付き、而もその伝播を疑わなかつた世代の遺産であるとアロンは論じている。一方、E・シルズはイデオロギーの起源は、基督教の千年王国 (millennium) の思想に求められるという意見を提出した。(E. Shils, *Ideology and Civility*. 「アメリカナ」第五巻八号) 即ちイデオロギーは絶対国家的体制には生長しない。何故なら其処には客観的基準で真善美の価値を考える近代的意味での知識人が存在し得ないから。イデオロギー的思考はこの知識人と共に生育したと云える。古代国家や近世絶対国家における闘争は主として現実の利害の為に戦われたのであつて、正義や真理の為に戦われたものではないことが多かつた。此の意味でイデオロギー的思考にはその生誕の時から現実世界の不条理や悪への意識的対抗があり、既存の秩序や権威に対する憎悪、中途半端な妥協への蔑視があつた。そして他方に自己の思惟の理想主義的実現の夢をもつていた。シルズの説く千年王国起源説も地上の悪の支配は一定の期間で終り、悪は永遠に絶滅して闘争も貧困もない完全な平和の王国の実現するであろうという希望が右の思想に極めて親近性をもつことを指摘したものであり、更に彼はこれに知識人のボヘミアニズムと十九世紀のイデオロギー的科学主義が結合して知識人の態度を規定したと主張するのである。即ちボヘミアニズムは凡ゆる伝統や因習から独立する点において、科学的原理は一切の権威を拒否し普遍的原理とその秩序を求める点において類似的結合の可能性もち、それは亦、妥協や合理的思惟、自己抑圧や責任性を徳として要求する市民社会とは正面から対立する素地を充分にもつていた。かくてこのイデオロギー的思考の信奉者は、たとえかりに彼が既存の秩序や思考原理に激しく攻撃を

加えることに積極性を示さない場合にも、少くとも彼はデイクトミー的思考の傾向をもつようになり道徳的分離主義者となるのである。

元来、科学理論自体の性質には、「一切か無か」はあり得ない。理論は常に他の理論を顧みつゝ検討され、絶えず新しい素材によつてその内容を拡充されるのを本質とする。若し理論の領域において一つの理論的立場のみが正当であり、他は無価値であるとするならば、それは恐らく極めて外理論的な現実的要因が思惟者の心理の中に忍び込む故である。一方、前述のようにイデオロギー的思考が知識人の誕生に結びつくとしても、それが直ちに現実感を失つた二者択一の素朴な思考を結果すると考えることは出来ない。形式的なデイクトミー的思考はむしろイデオロギーの公式主義、或はその悪しきエピゴネンと結び付くのである。吾々は亦現代における知識人の中立性についても充分に知悉している。これはその形式から云えばイデオロギー的立場に正面から対立するものであつて、マックス・ウェバーの没価値性理論などもその典型であろう。併しこれもやはり近代科学の所産には違ひないのであつて、イデオロギー的思考が科学の「一切の権威を拒否する普遍性」の「拒否」の語韻に実践的関心を置いたとすれば、科学的中立の立場は「権威の科学的自覚」にその理論的使命を感じていたと云えよう。厳密に考えられた没価値的科学は単なる非歴史的な形式主義とは同白の談ではなく、当為的価値概念を理論的領域から敢て排除するのは科学的認識の客観性が現実的パトスによつて担われているという自覚をもつ限りにおいてのみ存在理由をもつのである。尤も此の思考が比較的危機の社会的背景の薄い状況に成立し易いとしても、此の意識を見失つた中立性、「驚き」を忘れたテオリアは外見上中立の形式を取繕つていても、それは単なる傍観者の態度として「一切か無か」としてのデイクトミー的思考に陥る危険を充分に含んでいるのである。何故ならばこのような傍観者は実践的に無関心である反面、外的圧力があ

れば容易に極端な理論形式の二者択一をなし易いからである。

このようにディクトミイ的思考は、イデオロギーの見方の中にも傍觀者的見方の中にも認められるが、この思考を生み出すのは知的指導者であつて、一般の大衆は直ちにこの思考を反映するものであると論断するのは誤りである。何故ならば知識人の思考は屢々現実社会から浮き上つて、それが伝統的な市民社会の徳と常に衝突する可能性もあるからである。然りとすればこのディクトミイ的思考が大衆の思考型となり、科学や哲学の思考に入込むように美的規準や一般の家庭生活に迄浸入して来たのは如何なる理由によるものであろうか。特に現在の吾々の周囲にみられる多くの危機を孕む社会問題において、口にヒューマニズムを説き乍ら實際活動は暴力と破壊の行為に溢れていること、生活の無限の多様性を冷酷な禁欲主義によつてのみ解決しようとする思考には、これを助成する更に如何なる要因がかくされているかということを考えてみよう。

ディクトミイ的思考を導く要因として吾々は社会乃至文化の側からと心理主体の側からとの内外二面の交錯として考えることが出来る。併し社会学的立場から私は次の諸点が挙げられると思う。第一に前述した如き社会のイデオロギー的対立状況が考えられる。此の異種のイデオロギー圏内においては、夫々それに相応した思考様式乃至行為型が定型化され、就中その成員がこれを強制されて客觀的思考を封ぜられているとき、或は現在の所謂大衆化現象に伴われている場合、即ちその思考が主体の判断を含みぬ機械的な操作である限りにおいてディクトミイ的思考は特に著しい。即ち自ら思考することの喪失と、イデオロギー以外に従う基準を持たぬ激しい社会的緊張が人々をその何れかに色づけることは極めて自然な成行きであらう。大衆化現象とは人間関係がマス・コミ的媒体などによつて間接的接触を益々拡大せしめられ、或は官僚的機構の発達によつて拍車をかけられた結果、人間相互の關係が理性的思考によら



ず、感情や模倣によつて結合せしめられ、人々から自主的思考の習慣を奪い、暗示に対する盲目的追従に馴れしめる人間疎外の状況を指す。而も社会の政治的イデオロギーの分裂は一の意見への賛成を必ず他の意見への反対とせねばならぬという必然性を生み、不偏不党的立場は価値判断をなし得ない者の逃避所とさえ見做され、両極端の混淆は反つて非現実的とさえ考えられるのである。

第二に以上のイデオロギー的对立状況を更に分析してみると、そこには単に今日の世界を隔てている政治的イデオロギイの問題と共に、現代における教育の特殊な専門化に伴う思考的視野の局限、従つて総合的判断の欠如の問題が挙げられる。マンハイムは「現代の診断」の中で、このような状況における人間の政治的中立の危険と、社会的洞察力の再教育とを説いているが、私はむしろ部分的視野における政治的実践の危険を挙げたいと思う。というのはディコトミ的思考が問題とされるのは、その思考の真か偽の問題以前に無知に由来する場合が多いからである。無知は狂信や不寛容を結果し易い。現代社会はその必然的な社会機構に基づく部分的な人間行動を認めるのに余りに寛容であつた為に、本来その何れに対しても責任をもつべき行為の動機と手段とを分離するようになった。例へば狂信的な右翼革命や左翼の暴力に対し、その手段を非難し乍ら、その動機は屢々擁護されて来た為に、非合法な力への信仰は徹底的に排除されずに残されて来た。亦教育の特殊化は知識人を文学的知識人と科学的知識人の集団に分裂せしめ、現在尙その懸け橋を不可能ならしめている。これ等は一つのものを考えるのに共通の場をもたず、異つた次元から現実を思考しているのである。それは階級的立場であることも、思想上の伝統による場合もあろう。何れも現実の一つの見方を絶対化するによつて自己の存在を主張しようとする。例へば社会問題に対する実践的立場を、文学的乃至哲学的知識人は多く真理の客観性と主体性との対決として考え、社会科学的知識人はこれを没価値性理論批判の伝統から

考えるのが多いのではないかと思う。このような場合には、実際には対立的に二分して考えられなくてもよい問題までが思考的な二分法の故に無益な極端な闘争を展開し、社会の危機を一層助長する結果を招くようになるのである。

第三にディコトミー的思考を促進するものとして社会の連帯性の喪失が挙げられる。この連帯性は、凡ての成員にとつて重要と認められる諸価値が多様な場合、或は各成員が他の成員と融合することによつてその複我を豊富ならしめることが出来ないような場合に失われ易い。それは社会的非類似性を極端に示している異種人種の混合とか宗派的対立の場合に顕著であるが、亦それは社会変動による過渡期などにもみられる現象である。例へば旧秩序が崩壊して新秩序に移る過渡期、即ち制度が未だ実質的な權威をもたず、従つてそれが各成員に対して支配力をもたぬ時には、社会的統制力は減少して、社会の連帯性は失われ、このような場合に人々の傾く心理的不安は多くの闘争をよび起す有力な要因となる。此の状況は人間相互関係の緊密さを奪い、人々は連帯性を失つた孤独な自我を社会の中に見出すであろう。そこでは人々は落付いて闘争の諸原因を考え、話し合ひで解決の途を見出すよりも手取り早いパトスを基礎にして一か八かの行動的解決を望むようになる。そして目的の為に手段を選ばぬ行為とこれを裏付けようとする似而非理論が横行する。此の思考は理性の放棄であり、危機感ではなく悲愴感がその特質となつていのである。たゞこの場合に注意しなければならぬことは基礎的伝統の欠如したいはゞ「いき」の短い社会と此の思考との関係がある。例へば民主主義の方針を堅持し、資本主義という不動の立場で社会の秩序が保たれている諸国では、此の社会体制を無に賭けることは頭底考えられず、社会の改革は精々部分的問題の修正で片付くのであるが、現在のアジア諸国のように新秩序の伝統に欠き、且その経済体制にも弱体な社会では現実問題に逢会すると忽ちその底が露呈され、その解決には機械的な二者択一の論議が繰返される。これはその社会秩序が過渡期にある場合に一層拍車をかけられ

るのである。

第四の社会的精神状況として現実の破滅の意識及びユートピア意識を挙げることが出来ると思う。これは前述の未だ秩序の確立しない過渡期的現象とは異つた意味をもっている。人間理性の確信に満ちた社会では合理性が行動の基準となり易いが、一度びこのオプティミズムが震がされて来たとき、人々はその反動をより深く体験し、合理性の基準に対する必要以上の疑惑から無謀な賭を敢て行う状況に迫込まれる危険をもつようになる。現世紀の状況は原子物理學や宇宙工學の發達による輝やかなしい未來への希望と共に、一步誤れば地球の破滅ともなりかねない危機感とが當に逆説的二重性格として現代人の関心を蒐めていると云うことが出来るであらう。即ち人類が破滅に向つてゐるのかユートピアに向つてゐるのか不可知な状況において、これを考え抜く素材を提供されないときは狂信的な急進主義や孤高な傍觀主義が「一切か無か」の思考を端的に表明するのである。蓋し破滅の意識は人間を全く救いのない虚無感から、理論より行動に唯一の抛り処を求めしめるか、或は現實批判の形で考えられた進歩を社会改善の唯一最高の手段とみる急進主義に導くからであり、ユートピアへの欲求は中途半端では妥協しないという意識に基づくからである。これ等のあるものは一見ヒューマニズムに結合するように思われ乍ら、その実、残忍な暴力と冷酷な破壊によつて満たされている場合がかなり多いのである。現在吾々の周囲の状況をみても自由と權利を主張する者にして、政治的權利の濫用のみを知り、それが寛容の伝統に如何に深く培われて来たかを知る者の少ない現代の風潮に吾々は pessimism と政治的オプティミズムの奇しき混在を見出すであらう。

第五にこのような極端に走る思考と、その思考の担い手の階層的地位との關係が問題となる。彼等の階層的地位が社会的に不当に貶価されたり、強力な政治權力の故に政治生活から遊離せしめられたときには、その反動としての力

を現実社会の中に革命として実現させることが出来た場合にも、或はそれが欲求不満のまゝに止められている場合においても、その思想内容は極端化する傾向をもつのである。政治的生活からの遊離は、就中それが文化的知識人である場合には一層理想主義的形態をとるであろう。第三階級の憤懣を叩きつけたフランス革命などは前者の例であり、屢々引合いに出される十九世紀の独逸理想主義は後者の典型であつた。その前進性と後進性は市民社会の成熟の如何に関するものであるが、後者の場合、当時の知識人は具体的打算を超越した自律的精神、純粹な理想主義を具えていた。併し「實際の国家生活に伴う現実の利害關係に対する彼等の感覺の欠陥のために、彼等は崇高なものから無法奇矯なものへと急速に落ち込んでいった」(F. Meinecke, Staat und Persönlichkeit. S. 136)。これとやゝ似た傾向を吾国の知識人にも跡付けることが出来る。それは現実の危機を身を以て実感していない傍觀者の態度から生ずる帰結であつて、この場合、社会的人間の概念は抽象的な普遍的人類の概念に轉換するのである。

第六に「一切が無か」或は二者択一を單純に決定する場合の理論は、それが本来自ら苦心して作り上げられたものでない借物の思想であることを示すであらう。社会学的視点から云えば、文化受容が急激に行われた場合とか、文化的後進国が先進国の文化遺産を見さかいなく受入れねばならぬ状況に対応する現象である。対立的思想が簡単に拒否されるのは、それが自らのものでない借物の思想、或はその思考の源流を把握せず皮相的に受入れられた思想であるときである。何故ならば自己の努力を含まぬ借物は何時捨てても惜しくないから、亦逆に自ら苦心して作り上げたものならば簡単にその存在を無に賭けるには余りに貴重であるからである。此の思考は危機感に裏付けられたものではなく、流行の模倣にみられるような輕卒さと一種の思想的遊戯をその根柢にもつていのである。

第七に権威主義的性格とディクトミイ的思考の關係が挙げられる。権威主義的人間が物事に対する早急な解決の傾

向をもち、その思惟形式にデイトミーが用いられやすいこと、権力志向の具体化、固定的ステレオタイプ化の力と、曖昧性への不寛容との間には経験的類似以上のものが認められることに就いては屢々指摘されている。

此の権威主義的性格は、社会学的にみれば、種々の意味で権力組織の蔽存する社会構造、或はその意識の強く残存する秩序を前提としている。それはヒエラルキイ的序列への志向、外面的特徴による判断、強いことと優れていることとの同視、或はE・フロムの云うマゾー乃至サディズム的性格等と並んで、すべてを世俗的な善悪や強弱で判断し、黒白を明瞭に決定しなければおさまらぬ傾向をもっているのである。それは価値の基準を討論や自らの判断によらず、既存の権力の決定する枠を無条件に容認する故に、その権力の遂行や利害に反するものは直ちに不正であり、悪であり、これを支持し促進するものは正であり善なのであつて、現実にはこの両者以外には考えられないから、その中間の価値の多様性や深さには盲目たらざるを得ないことになる。封建主義的思考や神政的絶対主義的思考或は独裁主義的思考はその典型であろう。併し権力の形態を更に分析してみると、権力の内容には政治力のみならず経済力や伝統力各種の文化力があり、亦権力の主体には個人的権力と共に非人格的乃至集团的権力、公式的権力と共に非公式的乃至黒幕的権力、その制限を受ける度合に従つて絶対的及び相対的権力、明白な肯定か暗黙の承認かに従つて合理的及び非合理的権力などが区別されるであろうから (M. Marsal, L'autorité. 1958) 現代社会における権威主義の様相は益々複雑なものとして現われてくるであろう。

第八にデイトミー的思考の根柢をなす純粹好みの傾向は「物事は完全でなければならぬ」とする考え方一般に結び付いている。即ちそれは人間は不完全なものであるという認識から出発して、その不完全さを漸次に克服するような仕方ではなく、不寛容な革命主義としてあらわれる。現実自体が不完全なときに百パーセントの完全性を求めるこ

とは現実の多様性も生命の尊厳も無視して目的の為に手段を選ばぬ権力と結合する傾向をもち、譲り合いを拒否する結果となるであろう。この潔癖への志向は潔癖でない社会、完全でない社会を前提とする。ユートピアへの志向が生れるのは、その社会組織が余りにユートピアからかけ離れていたからであつた。屢々中流階級に比し下層階級が寛容を欠くと云われ、又不寛容な宗教的宗派は下層に多いと云われるのは、彼等が高度の物質的・心理的安定を欠き、又知的洗練を経験していないというよりも、むしろ以上のような完全性への要求が、社会的・経済的に圧迫された下層階級に強く現われ、道徳的には宗教において、而も不寛容な宗教によつて表現されるからである。吾々は勿論その潔癖さのもつ誠実性と純粹性を無視するわけにはゆかない。併しそこには元来歪められた社会が前提されて居る以上、これを超克すべき思考が必要以上に或種の行過ぎに陥らざるをえないことは当然である。社会の危機に際して急進的革命主義をとるか漸進的改良主義が効果的であるかは歴史的次元において決定さるべき決疑論であつて、イデオの次元で解決すべきものではないのである。

私は以上挙げて来た種々の、ディコトミー的思考を形成する要因を通して、正しい思考を導く途は社会の制度的側面の改革と共に、内在的には寛容の思想を内より教育する以外にないと思う。この人間改革を単に知識人の平和的趣味の問題としてのみ蔑視する限りでは、此の世界は永遠に危機より脱し得ないのである。何故ならば思想的寛容は不寛容な文化や社会制度の下では成育せず、逆に寛容な文化や制度は不寛容な成員と相容れないからである。現代社会の不調整の主要な原因はこのような制度と個人との分離であり、これらが協力して一つの方向に進まないならば、それはソローキンの比喻を以てすれば、健康を恢復しようとする病人に、彼等の病氣の原因たる食事や生活様式に何等の変化なしに喫煙のみを止めることを真面目に示唆する人の愚に等しいであろう。

## 2

ディコトミー的思考が思想的寛容の欠如に基づくことは云うまでもない。寛容とは元来、自己の不完全性や誤謬を犯し易い可能性の自覚から他人の過失や誤謬を厳しく責めない態度であつて、これは主としてルネサンス以後の良心や信教の自由に由来する概念であるが、最近では理論的異種の考え方に対する受容や心的態度にまで拡大されながら用いられている。周知のようにK・マンハイムが「イデオロギーとウトピー」の中で、マルクスの特殊的イデオロギーに対して自己の思惟の真理性をも相対化する立場とした普遍的イデオロギー概念も寛容の思考の結果には違いないのだが、それはむしろ科学的に客観的中立の相対主義的立場であつて、それ故にこそ彼はこれを更に評価的イデオロギー概念を以て補わざるをえなかつたのであると思われる。これについては此処では論及しないが、寛容の内容を明らかにする為にこれを中立主義と対比せしめてみよう。中立が対他的に無色無関係乃至没判断的立場にあるとすれば、寛容は本来自己に対して峻厳である故に他者を容認するという自主的性格を含み、単なる折衷論や無定見などとは勿論異つて一定の限度をもつこと、例へば理論的寛容は無理論乃至理論外的権力などには無制限に中立的立場をとりえないという生活信条を意味するのである。言葉の上から云へば寛容の思考はディコトミー的思考の対概念にはならない。何故なら寛容に対立する概念は不寛容であつて、ディコトミー的思考はその一属性に過ぎないからである。寛容の思考はそれ故、その結果において或る問題の決定に評価的態度を採ることはありうる。たゞディコトミー的思考が黒白の種別分けに急なるに対して寛容の思考は決定の過程に重点を置きその決定を最後のものとしない。従つて寛容の思考には理論的及び倫理的練達は不可欠のものであると云わねばならない。



グレート・ジャー及びリップセットは人間が成長し高い教養を受けるに従つて寛容も亦増大するという楽観論は受入れ難いとし、亦寛容か不寛容かという単純な二律背反に基づいて、特に政治問題を取扱うことの欠陥を指摘している。(N. Glazer & S. Lipset, *The Polls on Communism and Conformity*. D. Bell, op. cit.) 即ちそこには寛容の対象への認識度が関係して来ることを注目すべきで、例へば共產主義思想に対する態度についてみても、共產主義による危険を大、或は小とし認識した上での寛容及び不寛容の四つの類型が分析される。そして更に寛容には自己の立場の強い信念から来るものと無知から来るもの、不寛容にも嗜虐的残忍さから来るものと合理的な考えから来るものとが分析されるというのである。このような分析は心理学的アプローチとして有益な分析要具となる一面をもつてはいるが、寛容及び不寛容の概念は私の概念と異つて敵の思想の受容及び排撃という言葉と同義に用いられているようである。もしそうであれば寛容という紛わしい言葉を用いる必要はなく、亦それに本来の寛容の精神の響きをもたせるならば「敵の思想による危険を小として寛容な人」などという分類は無意味であり、余りに機械的であろう。このような質の問題には飽迄質的な分析操作がなさるべきであると思う。併し現在のイデオロギー的状况を繞つて寛容及び不寛容の問題は社会学的乃至政治学的に米国学界でかなり活潑に論議されている。

米国における思想的不寛容の原因をリップセットは「急進右翼の源流」(S. M. Lipset, "The Sources of the Racial Right", in "The New American Right" ed. by D. Bell. 1955) なる論文において次の諸点を挙げている。(一)米国人のピューリタンの道德氣質。即ち政治を道德的観点でみる傾向。黒か白で割切る傾向は對外政策の面に出ている。(二)貴族的伝統の欠如。即ち温健なレトリックの發達がなかつたこと。(三)大量移民。即ち一国民を形成する為に新移住民に対し不寛容な態度をとり同化を強要する必要。(四)支配的グループが自己の価値基準を押付ける為に法律を



恣意的に曲げるを容易にした特殊な状況、等がこれである。だが米国人のディコトミー的思考には他国と異つた事情が結び付いている。何故ならば米国の知識階層は他国における程対立する階級や社会革命を経験していないし、宗教に關しても歐洲におけるほどカトリックと自由思想の相剋を知らなかつたからである。勿論マッカーシズムの如き極端な国家主義及びその追従者の存在は否定出来ないが、必ずしもこれが全体的に支持されているわけではない。米国の世論が資本主義に引廻されながらも、「米国の良心」が常に思想的自由を最後の拠点として残していることにも注意しなければならぬであらう。此の小論ではその統計的な数字も、又英仏独などにおける夫々異つた寛容への思考様式の分析も割愛せざるをえないが、吾国の場合について一言付け加えておきたい。

日本人の寛容に対する考え方は従来「集团的寛容」とでも名付くべき特殊な形をもつていた。それは一定の集団内では寛容、それ以外の集団に対しては著しく不寛容であるという類型である。それは吾々の社会構造に深い關係をもつものである。即ち家族制度の下は「和」の思想は重要な支柱であつて、そこでは縦の和（親子關係）と横の和（夫婦・兄弟關係）が渾然とした一如一体の和を形成していた。併し此の和は集團の成員が夫々の身分的秩序において集團への情緒的一体感に埋没している状態（或は集團から分化していない状態）であつて、個人を超越した團結ではなく、個人が認められない状態、社会秩序に逆うことを許さぬ服従を前提としている故に主体的關係の中に結ばれるのではない。本来の意味での和は個人の自由と主体的意志關係の中に成立するものであるから、このような状態における同一集團内での寛容はむしろ「馴れ合い」とよばれるのが適當と思われるが、ともかく家族制度下の吾国では小集團において此の意味での寛容の形式が行われ易かつたのに対し、他集團に対しては妥協の余地ない排他性や対立を結果し、それが現在に到る迄或る程度日本人の社会意識を規定しているのである。そこには精神史的にも社会学的にも

種々の原因が挙げられるであろうが、何よりも価値の基準が社会的に一方的に決定されていたことが論理的レトリックの精神を欠如せしめた主要因であろう。尤も西欧的思考のかなり浸透している現在では過去の時代と異つた様相を呈していることは当然であるとしても、而もなおアカデミズムの抽象的思考を身につけた日本の知識人は、思想上の真理と前近代的な体制内の諸矛盾の合理化によつて保身の途を切開いてゆかねばならぬという背反する二面性の故に、思惟の寛容どころか益々極端に動揺する思考形式の中に投げ出されたというべきであり、現実と理想、保守と急進の対立の激化がその中間の基盤を一層不可能ならしめているのである。

以上の諸例などを参着しつつ寛容の社会学的基礎を求めるならば、次の諸点を挙げることができるであろう。即ち、  
(一) 争われている価値が結局は両立しうるものであることが一般に認められて居り、知識が大切にされて、レトリックは技術に関するものでイデオロギーでないことが、社会的に充分に認識されていること。これは社会的思想的にも高度に成熟した段階を示すものであつて（吾々はその適例を英国の議会政治にみる）、これにはその成員が或る社会的価値に対して強制的ではなく、自発的に結集している自主態勢が前提される。強制的（制度的）結合の場合には、その中に生ずる異種思想は反制度的方向をとるのに対して、自発的結合の場合には、その中に如何に多様な思想形態を生み出そうとも、それは成員によつて支持されている目的に方向付けられるからである。後者における成員は勿論、集団の中に埋没しない個性の確立を条件としているのである。

(二) 極端な階級的乃至階層的分化は矛盾する価値と規範を伴つて、個人或は集団間を益々疎隔せしめる誘因になる。一般に社会的に圧迫されている者、自分が保護されていないと感ずる者はイデオロギー的思考を受入れ易く寛容に欠く傾向がある。これは政治的思惟の問題ばかりでなく、例へば英米の保守的下級労働者は宗教的に最も不寛容な

宗派に属することが報告されている。社会主義的イデオロギーの優勢でない処では、人々は必ずしも個人的失敗の原因を社会制度の欠陥に転嫁することはしない。従つて極端な階級的制度的対立を持たぬ開放的社会秩序、政治を直ちに道德的問題に結合する必要のない安定性は思想的寛容の重要な基礎である。これなしには人々は益々相互に離反して或る問題を同一の次元で考える共通の場を失つてしまふであらうし、諸思想は益々平行線をたどるようになる。寛容には相互の接触による理解を欠くことは出来ない。「吾々が怖れなければならぬものは恐怖心それ自体である」という言葉は社会的緊張の多くが相互理解の欠陥に基づくことを示している。猜疑と不安の偏見を取除くものは開かれた人間関係であり、相互の理解を啓蒙する教育制度であり、そしてこれを妨げる無知や權威主義的パースナイティから脱却することにある。この場合各派の均衡を得た力関係及びその意志が成立し、非合法的力によつて自己の存在を保全する危険から救われるであらう。

(三) D・リースマンが「寛容の教師」とよんだマス・メディアについて注意する必要がある。(D. Riesman, *The Lonely Crowd*. 1953. Chap. 9) 現代社会はマス・コミュニケーションの発達によつて人間関係の範囲を益々増大せしめているが、マス・メディアの範囲が大きくなればなるほど、一層その諸媒体は他人志向的寛容の気分の中で消費され生産される傾向がある。そして消費の指導者としてのメディアは一般のスタイルの変化や豊富性を合理化する故にそれは趣味的な寛容にも関係をもつてくるのである。もしそれが好ましく指導されるならばそれは政治的精神的側面にも好影響をもち、逆にこれの未発達の社会ではその機会を逸するであらう。

このような寛容の社会的基礎を考えておくことは闘争の激化に伴つて、吾々の日常に経験される次の幾多の悪しき傾向を阻むに役立つであらう。その主要なものは、(一)ディコトミー的思考の傾向、(二)原理逸脱の傾向、(三)目的優先の

傾向、(四)拡大遡源化の傾向等である。すべて私の用語なのでこれを説明すると、第二の原理逸脱の傾向とは例へば如何なる理想をもつ闘争でもそれが末端に到ると原理を離れて闘争の為の闘争となることであり、(理想のみを説くことはユートピア主義ともみられるであろう)、第三の目的優先の傾向とは、ともかく勝ちとることが先決問題で、その手段や内部の批判は後廻しにするという考えであり、(これは必然的に漸進的改良主義を拒否する)、第四の拡大遡源化の傾向とは、全体からみて些細な小事件が原理的な大問題に還元されつゝ意識され或は宣伝されること(これは単なる機能主義とは異つた歪みをもつ)、を指すのである。併しこのようにみてゆくと、これらがすべて或る意味で寛容の欠如に基因していることが明らかになる。現代社会の闘争は以上のように本質問題から逸脱した処にも無数に発生する基礎をもつものであつて、それにディコトミー的思考が輪をかけるのである。

吾々は原理上のイデオロギーというものは、その本来の環境から他の環境に移される場合には、その当初の目的や意味は著しく歪曲されること或は正反対の方向にも発展しうることに注意しなければならない。それは本来の政治的価値が特殊な社会的価値によつて分離せしめられる為である。例へば社会主義と自由主義とは同じ伝統の中に生育したものであるが、自由主義が資本主義によつて独自の色彩を与えられるようになってから此の両者は相互に対立的地位に立つて争うようになった。吾々は理想のない実践を考えることは出来ないにしても、その生み出す従属的な諸性格、歪曲されたイズムの行方を見過してはならない。勿論イズムの対立すら誕生しない時代或は地域では、世界史の方向を明確にする意味で此のイズムの闘争は重要な意味をもっている。例へば経済的後進国においては知識人の間に共産主義思想が容易に根を下しやすい傾向にあることは充分に理解出来るし、逆に比較的経済的社会的に発達して労働者の要求が或る程度まで満たされている国では社会体制の変革や政府攻撃は無益な過激主義に思われるである。

う。そこでは労働運動の方法が自由を犠牲にすることなく大衆の統合を可能にするのである。併し人々は各制度や状況の中に種々の問題に直面し、それに国際情勢や党派問題などが絡んで来るので同じ制度でも種々の異った意味をもつようになるのである。吾々の周囲の現実に徴してみても、現在、社会的にかなり進んだ西欧国ではイズムの対立でものを考えることは大して意味をもたなくなつて来たし、事実「イズムの勝利」の為に一切を投出そうとする者は滅多に見出すことは出来ない。即ち社会問題を観念的段階でものを考えることが、現実の多様性に気付いて来た諸国では、堪えられぬ程空虚に思われるのである。共產主義はその凡ゆるヒューマニティや合理主義に拘らず、現段階では論争の自由や批判の自由を犠牲にする。それは計画社会の途上にある体制として止むを得ぬものであるかもしれないが、併しそれがディクトミイ的思考を深く植付けらるならば、他日の結実を益々貧困にするであろう。たゞ此処にイズムの支配を排するということは、勿論単なる現実主義を容認することではない。「ユートピアンの最大の欠点は単純なことであり、リアリストのそれは不妊性であることである」(E. H. Carr, *The Twenty Year's Crisis*. 井上訳十六頁) 当然のことながら、右の形而上的イズムの支配からの脱却は、現実の、而もより創造的な歴史的立場から超克されねばならない。この場合の創造的と云う意味は単純に歴史は資本主義から社会主義に移るといつた類の公式を指しているのではなく、亦単にすべてを吾々の良心に訴えるというていのものでもなく、吾々の善意(例へば寛容)の科学的自覚を背景として出発することである。特に現在の危機的社会では無数の歴史的立場の出現が可能であり、吾々の社会的基礎がユートピアでない限りその「進歩的」立場は再び二分法の一方の極を代表するにすぎないものとなつてしまふであろう。それは理論的克服であつても、社会的危機の解決には役立たぬことになるばかりでなく、不用意に主張されれば反つて闘争を激化する結果を招くのである。

現代のディクトミイ的思考はもしもこれが現在の無益な闘争を徒らに助長することのみ役立つものとすれば、その原因を明らかにすると同時に、これを積極的に克服する途を示すことは危機の時代にあつて極めて重要な意義をもつものである。これは亦将来の戦争を未然に防止する方策でもありうるわけであるが、この種の問題には社会的な機構の改革と共にその基底をなす人間の改革が併行しなければならず、その何れか一方を無視した仕方では決して究極の解決には近づき得ないと考える。即ち教育と制度の問題は共生することによつて現実解釈の理念化から救われるのである。B・ラッセルは闘争の根源を恐怖にあるとみた。恐怖を同じくする人々は団結し、他の集団を攻撃することによつて恐怖感から脱しようとする。而も社会集団が高度に組織化されると、その指導的少数者はその成員を繰返し宣伝によつて狂信や催眠状態に陥れようとするのであるが、このような暗示にかゝらぬようにするのが教育なのであるという。確かに現在の闘争の多くは何れが正であり或は不正であるかではなく、一つのものに対する見方の相違がこれを誘発するのであつて、恐怖も対象の意志に関係なく主観的に形成される場合が多いのである。而も自らの陣営の理念と利益のみを絶対至高と考えているので、J・デューイも指摘するように、事実上相互に依存しなければ生きて行けないにも拘らず、このような国際間の政治的経済的機構のずれが紛争の原因となり、彼はその対策として戦争法外追放の原則と世界民主主義連邦の樹立を構想したのであつた。

併し現実的には一層具体的なプログラムを展開する必要がある。E・シルズが前掲論文において所謂イデオロギー政治に代るものとして挙げた市民政治の綱領は吾々の目的に対して役立つものをもつてゐる。それを要約すれば、(一)権威の慎重な行使、(二)それ自体の価値に基づく事物の判断、(三)過去の伝統の尊重、(四)徳の極端化単純化の排斥、(五)己自身の偏見の克服、等である。この個人的教育の必要性に関してやゝ同じ傾向にあるものとして、ライト・ミルズ

が“The Cause of World war Three”なる論文において述べた知識人の実行すべきプログラムを併せて参照しておこう。それは(一)人類の現実状況の適切な定義、(二)討論による真の綱領の展開、(三)形式化した民主主義に内容の附与、(四)純正の目的に対してのみマス・コミの手段の使用、(五)資本主義への対決と、これに代るべきものの討論、(六)国際的にものを考えること、(七)重要な情報の充分なる公開、(八)冷戦に対する参戦拒否の態度、(九)敵陣営の知識人と接触して単独講和を結ぶこと、(十)牧師や科学者に働きかけること、の諸項目である。此のミルズの主張には権力を論じつゝ政治を無視したユートピア主義、政治への敗北主義乃至殉教者的調子等の批判が加えられるにせよ或程度廿世紀の良識を具体的に展開したものと云いうるであろう。私は以上の綱領を敢て異議を挟むものではないが、一言にして尽せば寛容と、その社会的基礎への再組織のための努力を強力に促進する必要があると思う。蓋し口に寛容を唱えても、それを促進する社会的関心を欠いているならば、それは非現実的な空文に終り、その動機が如何に個人的な祝福を得ても、結果において対社会的には罪惡の責任を負わざるを得ないからである。

P・ソーキンも「ヒューマンティの再建」(The Reconstruction of Humanity. 1948)において現代の危機に対する極めて示唆的な構想を展開した。彼は従来の対危機的療法が政治的なものであれ、文化的なものであれ何れも部分的要因であつて根本的対策とならぬことを述べ、彼の所謂「社会・文化・パースナリティの三位一体」の基礎理論から利他主義を分析綜合しつゝ現代社会の批判を行つた。ソーキンの主張は結局利己主義を捨て、利他主義につく以外に現代の危機を克服すべき途のないことを述べてその基礎を社会学的に追求したものであるが、彼の利他主義の概念はこゝに論じて来た私の思考的寛容の概念に極めて近い或は重なるものをもっている。彼が人間を権力による強制関係におくことを最小限に止め、契約関係を自発的なそれに代えそれを以て家族的共同体的関係を強力に押し

進めねばならぬこと、人間の利他主義化を強調し、その為に吾々の文化と制度を実らせ、人間を利他的ならしめるより善き技術を考えること、そしてこれを通じて一層完全な計画を普及し宣伝することを平和の実現方法として述べているのも結局は同じ主旨に出るものであらう。

以上私は現在の社会的危機の一端を人々のディコトミー的思考より捉え、思想的寛容の必要性をその社会文化的基礎と共に考察して来た。殊に現在の吾国における紛争に対して指導的な知識人の立場がやゝもすると観念的な知性信仰の故に此の思考に陥り易い現実が絶えず私の念頭にあつた。繰返される幾多の「是か非か」の論争に対して案外吾国の進むべき道への積極的な提言が少なかったのも事実であつた。「抵抗せぬことも罪である」という簡単なスローガンの下で人々は徒らに怒りの子となり、怒らざるを得ぬ理由のみを主張し、怒らざる者の卑怯を非難し、暴力とその復讐による怒りの悪矛盾の膨脹を来している。そして無批判に制度と信念の問題とを混同し或は分離し、MRA公式とプラグマティズムが入り乱れた状況にある。吾々は制度を論ずる立場から憎しみの体系を追放し、人々の善意を信ずる意志を社会的自覚を以て補足し、現実を歴史的地平において眺める立場に統一しなければならない。此の意志と制度の問題は決して別個のものではありえないであらう。蓋し歴史はそれが正しく述べられていれば、必ず吾々に寛容と知恵とを教えるものであるからである。

#### (附記)

此の論文は昭和卅三年度(前期)学事振興資金研究として提出した「現代社会的危機の研究」のうち、対立する思考型を取扱った部分の要約である。